

ハノイ日本人学校の村上です。

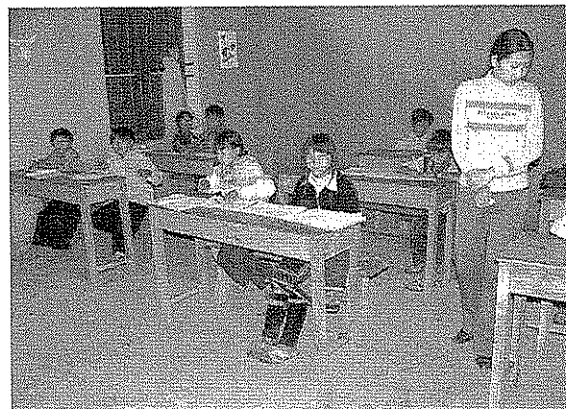
前回「学校教育法と教育」というテーマで、少し抽象的な話になりましたので、今回はその実態についてベトナムの現状とハノイ市の小学校を中心にしてレポートします。まずはベトナムが直面している課題についてです。

1 教育の問題点

ベトナムでは、小学校の学費は無料ですが教科書、教材費は全て親持ちのため、金銭負担の問題が生じています。また、担任が開いている放課後、休業中の「補習を名目の私塾」へ通わせなければならないため、そのための費用もかなりなもののように、親にとっては頭の痛い話です。日本と同じように、ベトナムでも教育はたいへんに重要視されていますが、政府の教育予算への配分という点ではまだまだ不十分なこともあるようです。

次に教員の絶対数が地方では不足しているため、大学を出た若い教員は何年間か地方で勤務しなければなりません。実際に、ハノイから500キロメートル離れた山間地の学校を訪問したのですが、そこで教えている先生は全て若い女性で、ハノイの師範大学を出て間もない人たちでした。総じて教員の月給は低いので、都市部のように放課後、休業中にアルバイトができるのは何とか生活ができますが、山間地方などの子どもの数の少ない学校では、教師の月給だけでは十分な生活できないのが実態のようです。このような状況ですから教師になる人が少なく、教師不足のため午前と午後の二部制を行っている学校が多いようです。朝から遊んでいる子どもを時々見かけますが、これは午後の部の子どもたちです。けっして、学校をサボタージュしているのではないのです。次には、校舎の絶対数が不足しているということです。国家のスローガンとして、「教育は重要だ」と言うものの、その財政のほとんどが地方の町や村に委ねられていますので、貧しいところでは学校自体が建てられない所もあります。教室に電灯の無い学校もありました。しかし、子どもたちの目は太陽の光で輝いており、先生の教えを一生懸命に学ぼうという視線が痛いほど感じ取れます。

一方で、ハノイのような都市では、生徒数が多いため、逆に二部制を行っている学校があります。二回に分けないと子どもたちが収容できないという皮肉な状況です。都市部は、また別の悩みを持っています。学校の半日の学習だけでは良い成績が得られないので、家庭教師を付けたり、補習を受けなければなりません。その教える人は、先程も出てきましたが、クラスの担任の先生なので、成績のためにも絶対と言っていいほど通わなければなりません。もちろんたくさんの費用が必要になってきます。親は良い成績を取らせるためにせつせと担任の「私塾」へ通わせます。先生はこのようにして、少ない「月給」をアルバイトで補うわけです。



山間地域で学ぶ子どもたちとその先生

2 学校、学級の様子

ハノイでは最近、私学の設立が認められ始めました。授業料は高いのですが、全日制ですし英語やコンピュータを利用した学習があるというので、入学のための競争は激しい

ものがあるようです。公立学校でも、名門校と呼ばれる学校にはこぞって入学希望者が殺到します。しかし、ここに入るにはさまざまな制限があり、だれでも入れるわけではありません。

一学級の定員は、五十人までです。それも、日本の教室を一回り小さくしたくらいの広さですし、後部のロッカーや窓側の観察棚はありません。三人がけの長机だけが入ったら教室はいっぱいになります。一部の重点学校を除いては、教材や教具らしきものはほとんど見当たらず、教科書中心の座学です。小学校の先生は、ほとんどが女性です。男性は1割にも満たない程度です。その指導法は、昔の日本のようにとても厳しいものです。先生の権威は絶対的なもので、生徒も親も「先生は怖い」というイメージが強いです。日本のような手取り足取りの「優しい教育方法」に慣れている私にとっては驚愕に値します。

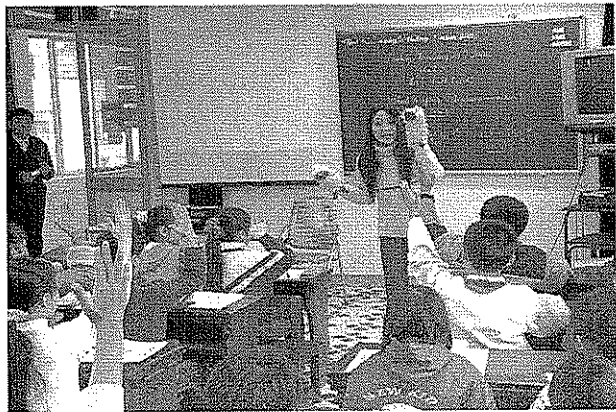
全日制の学校では、給食の後の昼寝があります。いったいどうやってこの狭い教室で寝るのか、不思議でたまりませんでした。やり方は簡単でした。三人用机をくっつけて大きなベッドにしその上に寝る人と、空いた床のスペースに寝る人がいるのです。暑いベトナムならでは工夫ですね。そうそう、暑いといえば冬に小学校が全部休校になった日がありました。尋ねてみると、小学校では気温が10度以下になると学校は休校だそうです。いかがでしょうか、皆さん。もし日本で朝の気温が十度で休校になるとしたら。この休校の理由は簡単です。学校に暖房設備がないから寒くて勉強どころではない、とのことでした。南のホーチミン方面は別にして、ハノイのような北部地域では10度以下になることもけっこうあります。

3 カットリン小学校の様子

公立小学校の中でもハノイ市で人気のあるカットリン小学校では、なかなか十分な教育を受けています。優秀教員の称号をもった先生がおおり、英才教育を実践しています。この学校の特徴は、通常は小学校3年生から導入されている英語を2年生から実践している点です。この校長先生の方針により、特別に認められていると聞きました。本当は、小学校1年生から実践したいのだが・・・、という校長先生の声も聞かれました。英語科の教員は、特別講師として2名が採用されています。今回参観した授業は、ペーパーサートを使ったり、CDで音楽を流したり、プロジェクターで映像を使ったりと工夫しながら授業を進めていました。

しかし、授業自体はたいへんにアップテンポでテキパキとした感じを受けました。前列から順番に発音させたり、列ごとに一斉に言わせたりと私たちが初めて英語を習った40年前のような方法で進め方でした。この英語講師の願いは、やはり「ネイティブスピーカーの発音を聞かせたい」とのことでした。いくら勉強したとはいえやはり学問の域を出ない自分の英語の発音に限界を感じていることが分かりました。

次に情報教育（IT教育）に取り組んでいる点です。ここベトナムでも、この



カットリン小学校での英語授業

数年のコンピュータを中心としたIT革新は目を見張るものがあります。金銭的にパソコンを買うことができない家庭も多いので、街には「インターネットカフェ」が花盛りです。「ADSL」や「INTERNET」の文字が裏路地や田舎の方でも見られます。そしてそこにはゲームに興じる少年少女、若者が溢れています。このようなベトナムの状況の中で、このカットリン小学校では、イギリスから寄贈されたという24台の児童用コンピュータと教師用1台をコンピュータ教室に設置して指導しています。主に3・4年で文字入力、5年生でプレゼンテーション（ちなみに小学校は5年生までです）を学びます。

ただし、カットリン小学校のような設備を持った学校は、都市部でもまだまだ少数であり、この学校は恵まれているといえます。ベトナム政府は識字率を高める政策を重点課題としてあげていますが、地方の教育と都市部の教育の格差は政府の努力にもかかわらず拡大しているように思われます。